

# 岳温泉を襲った豪雨災害

## 豪雨による山崩れ

文政7年（1842）8月15日夜、福島県安達太良山の北にある鉄山で大規模な山崩れが発生し、現在のくろがね小屋付近にあった温泉場の嶽湯を壊滅させた。右の図1はその土砂災害を、図2は温泉場復興の候補地を表している。

8月15日は現在の太陽暦では9月7日で、台風シーズンである。この災害を詳細に記した今泉家文書『岳山崩一件』には、「8月上旬より大雨晴間なく降続き、15日には殊の外大風雨となり、……」とあるから、長雨、台風の豪雨によって発生した土砂災害であろう。

## 被害状況

『岳山崩一件』は、山崩れ発生時の模様を次のように伝えている。「……どンドンという山鳴りが絶え間なく聞こえたが、山川の出水が石にあたる音かと不審にも思わなかった……」が、「亥の刻（夜10時）すぎ、小屋（温泉宿）北の方湯前神の上の山が物凄い音とともに瞬時に崩れ、小屋小屋を一気に押し倒した……」。こうして大小10軒ほど小屋のあった、山奥の温泉街は大惨事となり、二本松領内最大の災害といわれた。

右図1には、崩落箇所（ヌケアト）と地割れ箇所（ヒツケ）が描かれている。この崩落の規模は『奥州二本松嶽山変事筆記』によると、幅十四五間（一間は1.8m）、長さ三十間と記されている。更にもう一ヶ所、図1には描かれていないが、西方の「滝ノ湯」の傍でも崩落があって、2箇所の崩落によって、幅二十五六間、長さ六十間ほどの間、沢が埋まって平地のようになったという。

15日嶽湯にいた人数は196人で、うち死者65人、大怪我20人と記録されている。しかし、小屋によっては一人も残らず死に、正確には調べ得ないので番所改帳の人数も正確であるかどうか分からない。

## 救済状況

岳山崩れは、郡山より来た者が山を下り深堀の名主方まで知らせ、名主安田太郎左衛門より藩庁へ注進された。藩は翌16日朝、郡代・郡奉行・代官が中心となり、藩医や徒士目付・同心目付外30人ほどと、玉井組、杉田組、渋川組より動員した救助人数600人を災害の救助に当たらせた。この災害救助には即日郡代羽木権蔵が現地に急行して指揮をとり、24日には家老日野源左衛門が出張している。前記各組より動員された人足は、延べ2,300余名に及んだ。救助は、大石を除き、石を割り、川下へ流れた死体を捜索する等困難を極めた。また病人へは食物、夜具、衣類、わらじ等が支給された。

## 嶽湯の再興

藩は翌文政8年（1825）郡代伊藤九兵衛を指揮者として、領内各組よりの人足御用・御用金をもって、塩沢村近く十字に引湯して、新たな温泉場を建設させた。

再興場所の候補地として、塩沢村の十字と深堀の岫下の二ヶ所があった。郡山村の名主今泉半之丞や高木村名主日向七郎左衛門、白岩村名主鈴木兵内などが検分した結果、「岫下は難所が多い上、埋め樋も出来ない場所があり、入湯出入も難しく、普請の費用は莫大になりかねない。十字は格別雪も少なく、年中定湯で出入も自由に出来、後世の繁栄にもなるのでこの地に新湯を引きたい」（文政八年四月「嶽湯御再興仕様積併申立書扣」）と申立てている。

再興された岳温泉は、戊辰戦争で二本松藩士の手によって焼かれるまで非常な賑わいを見せた。その後、現在の岳温泉街のわずか南、深堀村に再建されたが、ここも明治36年（1903）の大火で焼失し、現在地に温泉街が完成したのは明治39年（1906）のことであった。



図1 『文政七申年八月十五日嶽山崩之図』（今泉家文書）／郡山市歴史資料館蔵

图2 『文政八酉年四月嶽湯御再興二付湯樋筋見分絵図』（今泉家文書）／郡山市歴史資料館蔵

